

博士学位申請論文審査報告

早稲田大学政治学研究科

博士学位申請者：隠岐-須賀 麻衣

論文題目：Political Art as *Psychagogia*: An Interpretation of
Political Philosophy of Plato's *Politeia*.

「魂の教導としての政治術-プラトン『ポリテイア』における政治哲学の一考察」

受理決定日：2017年1月18日

最終口頭試問：2017年4月15日

(早稲田大学早稲田キャンパス3号館教室)

審査委員 主査 佐藤 正志 早稲田大学政治経済学術院教授
(西洋政治思想史)

副査 谷澤 正嗣 早稲田大学政治経済学術院准教授
(政治理論)

副査 厚見恵一郎 早稲田大学社会科学総合学術院教授
(西洋政治思想史)

副査 金山 弥平 名古屋大学文学部文学研究科教授
(古代ギリシア哲学)

1, 論文の構成

論文の構成は、以下の通りである。

PREFACE

CHAPTER I. WHERE PLATO' S POLITICAL PHILOSOPHY BEGINS

1. Introduction
2. Polis and Soul
 2. 1. Polis as a Large Letter
 2. 2. Method of Inquiry
 2. 3. Emergence of the Political Dimension
 2. 4. Other Perspectives—Nomoi, Gorgias and Apology
3. Establishment of Polis
 3. 1. Polis of Pigs
 3. 2. Luxurious Polis
 3. 3. War, Guardians and Purification of Polis
4. Summary

CHAPTER II. CONDITIO HUMANA AND ENVIRONMENT FOR EDUCATION

1. Introduction
2. Conditio Humana
 2. 1. Perception of Rhythm and Harmony
 2. 2. Physis
3. Environment for Education
 3. 1. Healthy Place
 3. 2. Breeze Bringing Health
 3. 3. Penetration
4. Summary

CHAPTER III. EDUCATION THROUGH MOUSIKÊ

1. Introduction
2. Upbringing through Harmony and Rhythm

2. 1. Habit, Pleasure and Mousikê
2. 2. Harmony for Auditory Sense
2. 3. Rhythm for Auditory and Visual Sense
3. Education through Poetry
 3. 1. Verbal Falsehood
 3. 2. Comparison of Poets with Lawgivers
 3. 3. Poetry in Education
4. Banishment of Poetry and Mimêsis
 4. 1. Banishment of Poetry
 4. 2. Problem of Mimêsis
 4. 3. Mimesis and its Audience
5. Summary

CONCLUDING REMARKS

BIBLIOGRAPHY

2, 論文の概要

本論文は、プラトンの哲学において展開されている政治術を、彼の中期対話篇である『ポリテイア(国家)』を主たる研究対象として、教育の観点から考察することを目的としている。

論者は、プラトンが教育を、理想的なポリスの建設において「最も重要な唯一の事柄」としていることに着目する。それは、プラトンにとって政治を「行う」ことは、人を「教育する」ことを意味していたからである、と。そしてこの「教育」が、教育を受ける人間の魂(Psychê)を導く(agô)ことを意味することに本論文は焦点をあててゆく。

第一章「プラトンの政治哲学はどこから始まるのか?」では、政治とは教育であり、魂を導くことであることが、『ポリテイア』の叙述の読解を通じて示される。『ポリテイア』全体の語り手であるソクラテスは、第二巻において持ち出される「ポリスと魂のアナロジー」まで、政治にかかわるテーマに触れることがないように見える。なぜなら、このアナロジー以前の議論は個人の正義の問題に限定されるためである。しかし実際は、「政治的なるもの」は、このアナロジ

一が言及される以前、対話者であるグラウコンとアデイマンテスが詩、特にホメロスとヘシオドスという二大詩人を引用することによって、既に議論のなかに現れていることが指摘される。個々人がもつ正義の定義は、各々が幼い頃に「父親たち」によって聞かされていた詩によって規定されているためである論者は分析する。

ここで、「父親たち」によって教えられた詩が個人の正義の概念を規定するというまさにこの点において、『ポリテイア』は「政治」をテーマとすることになるとされる。父親たちがホメロスやヘシオドスの詩を用いて子どもたちに正義を教えたまさにその瞬間に、たとえ家の中で語られた教えであっても、それは個人的正義ではなく公的正義になり、政治的なものが始まった、と。

この教育と詩の密接な関係は、言葉によって建設されるポリスの第二の段階である、贅沢な、熱で膨れ上がったポリスにおいて教育と詩が初めて登場することによっても裏付けられるとされる。

第一章で明らかになった教育と詩の関係を前提としながら、第二章「人間の条件(*conditio humana*)と教育のための環境」は、まず、教育を受ける主体となる人間の性質を考察する。『ノモイ(法律)』においても示されるように、プラトンは、他の動物から区別される人間の条件を、運動における秩序と無秩序であるところのリズムとハーモニーを感覚し、そしてそれを他者と共有し、それに喜びを覚えることであると定義する。詩における音楽的要素であるリズムとハーモニーは人間の条件としてこのように定められる一方で、幼児や子供が人間となるためには、この二つの要素の教育が重要であることが示される。リズムとハーモニーの教育、それはすなわち聴覚と視覚の教育であるが、そのために必要とされるのが、「健全な土地」としての教育環境である。この土地には良い土地から健全さをもたらす「風」が吹き、子供の聴覚と視覚に、彼らが気づかぬうちに美しいロゴスへの親しみを覚えるよう働きかけていることが描き出されている。

第三章「ムーシケー(*mousikê*)による教育」では、ムーシケーによる教育の内容が考察される。ムーシケーとは、音楽や歌舞、そして詩の総合概念であるが、リズムとハーモニーはその音楽的部分を、詩や悲劇の内容はそのロゴス的部分を構成している。前者は、詩や悲劇における人物の声色と身振りといった人物の態度を、視覚と聴覚に訴える仕方で再現する(*mimêsis*)。これは、まだ言葉が理解できない幼児や子供に、いずれ理解できるようになる詩や悲劇に親しみを

覚えられるようにすることを目的としているとされる。後者に関しては、プラトンは、理想的なポリスにおいて受け入れられる詩とそうではない詩の区別を、細心の注意をもって設けていることが指摘されている。詩は、子供を適切に教育することができるほどの力を持つと同時に、彼らの魂を墮落させてしまうこともできるほどの力を持つからである、と。このように、プラトンは、一方において詩に有益性を見出しながら、他方で不適切な詩の追放という、一見すると矛盾した議論を『ポリテイア』において展開しているとされる。

こうして本論文は、プラトンの「政治」哲学を考察するための一つの視座を提供することができたとされる。それはすなわち、人間の魂の教育こそが、まさにプラトンにとっての「政治」であったということである。

3. 論文の評価

論者によれば、本論文の試みは、『ポリテイア』の「再政治化」の試みである。広く知られているように、カール・ポパーは『開かれた社会とその敵』において、プラトンの政治構想が孕む全体主義的な危険性を厳しく糾弾した。こうしたプラトンの政治構想に対する批判は、プラトンの政治哲学研究において大きなインパクトを持ち、『ポリテイア』の「脱政治化」が大きな潮流となった。論者は、こうした潮流における問題は、『ポリテイア』読解における「政治的なるもの」が現代の「政治的なるもの」の理解によって支えられている点にあるとする。プラトンの政治哲学は、たとえば「イデオロギー」や「政治体制」といった視点から、現代の我々が「政治」の概念のもとで中心的テーマと考える政治構想の議論のなかにのみ見出されるわけではない、と。プラトンにおける「政治」は、個人の魂の問題と密接不可分な関係にあることを示すこと、これが論者の考える『ポリテイア』の「再政治化」である。

そこで、本論文の意義は、なによりもまず、「政治は魂の世話をする技術である」とするプラトンの主張を政治哲学の主題として提示したこと自体にある。それは同時に、プラトンの政治哲学の焦点を、「哲人王」の統治や三階級によって構成される政治秩序から、ポリスを構成する人間の魂に移しかえる事を意味し、そこに、プラトン政治哲学へのアプローチにおける論者独自の主張がこめられている。

上記の視点にたつてプラトン政治哲学における政治の技術を考察した論者は、政治を「行う」ことと、人を「教育する」こととの重なりを、『ポリテイア』の

叙述に即して明らかにし、プラトンが、教育を、理想のポリスの建設において「最も重要な唯一の事柄」としていることの意味を明らかにしている。

また、そこにおける教育が、知識の伝達ではなく、「魂を導く」ことであり、そのために音楽と詩（ムーシケー）が重視されていることを説得的に示している。とりわけ、聴覚と視覚に焦点をあて、教育の対象である人間とその環境についての議論、なかでも、ロゴスに先立つ快苦に関わる養育における、リズムとハーモニーによる習慣付けの重要性の議論に、論者の力点と特長が現れている。

こうして、プラトンの『ポリテイア』のなかに、ポリスを構成する人びとを対象としたムーシケー教育の重要性を見出す事を通じて、プラトンにおける「政治的なもの」の概念の見直し、ひいてはプラトンの「政治」哲学とは何かについて、重要な問いかけを発すること、本論文の意義が存している。論者は、プラトンの著作のギリシア語テキストに内在し、その精緻な読解を通じて、そのような学術的成果を達成している。

もちろん、その成果はそこで完結するものではなく、さらに根本的な課題を提示するものである。論者自身も、一般に強調されている、『ポリテイア』における「詩の追放」と論者の強調する「詩による教育」という矛盾をどのように解釈するべきについて論じているが、詩と哲学の争いに内在する「政治」とは何かに関する議論、さらに政治哲学とは何かに関する議論は、論者の視点からさらにいっそう深められなければならない。

確かに、理想国家からの詩の消滅（詩人の追放）という記述をもって、プラトンにおける「詩と哲学の争い」を強調する従来の『ポリテイア』解釈との違いは、新鮮なものといえる。しかし、詩や音楽の公共的また教育的な役割の重要性を強調することが、ただちにプラトンの政治哲学の核心に結びつくかどうかには、議論の余地があるように思われる。「魂の教育」にとって最も重要なのは、哲学ではなく、本当に詩なのであろうか。ノモスによる正義とピュシスによる正義を区別することからプラトンの政治「哲学」が始まるとすれば、「魂の教育」を政治とするということだけでは、かれの政治哲学の意義をとらえたことにならないのではないか。

また、プラトン政治哲学の論者の視点からの読み直しは、現代的にどのような意義があるのかも問われるであろう。確かに、理性中心主義と見なされがちなプラトンの政治哲学が、美感的なものを通じた幼児の政治教育というテーマ

について論じていたというのは、興味深い指摘である。それは、現代リベラリズムにおける理性の偏重に対する批判という意味をもちうるかもしれないし、シティズンシップ教育、政治と情念の関係といった現代政治理論のテーマに関する言及が期待されるところでもある。

しかし、「教育は政治的である」、「詩的（美感的）なものは政治的である」という論文の中心テーゼが、「詩を通じた幼児教育には政治的な意味がある」という指摘に留まらず、「詩を通じた幼児教育こそ政治そのものである」という主張だとすると、プラトンの時代のポリスという文脈を抜きにして、今日のリベラルな政治にとって果たしてレリヴァンスがあるのであろうか。

これらは、論文の成果によって喚起される課題であり、また論者の今後の研究への期待でもあり、論文の学術的成果を損なうものではない。

4, 結論

本論文は、プラトンの『ポリテイア』を中心に、プラトン政治哲学とは何か、一つの視点から明らかにしようとしたものであり、丹念にテキストを読み込んだ成果が十分に示されている。この研究成果は、政治思想史研究の進展に必ずや寄与するであろう。審査委員一同は、その学術的貢献を高く評価し、本論文は博士(政治学)の学位を授与するに相応しいものであると判断する。

2017年7月5日

佐藤 正志
谷澤 正嗣
厚見恵一郎
金山弥平